

単身者の風景と「亀」

——津村記久子「給水塔と亀」の想像力——

一 「給水塔と亀」と「無縁社会」

「給水塔と亀」(『文学界』二〇一二年三月号)の執筆契機について、津村記久子のはっきりと語っている。つまり、本作は「無縁社会」という言葉を作り出したテレビ番組で取り上げられた、青森出身の男性の話に影響されて書いた小説^①ということである。この「テレビ番組」とは、二〇一〇年一月から二月にかけて放映されたNHKスペシャル「無縁社会」――無縁死^② 3万2千人の衝撃――(以下、Nスベ「無縁社会」)を指す。単身者が誰にも知られず亡くなり遺体の引き取り手もないといった事例を中心に、日本社会の「無縁」化を取材したドキュメントである。「男性」は六十代で家族がおらず、青森の両親の菩提寺にお布施を送り続けていた。東京の自宅で亡くなった時点でも働いていたという。津村は「この人は一人で亡くなることにさしたる思いがあったわけではなく、たまたま亡くなってしまっただけなんだろうなあ、という印象」をもつ。そして、もし男性が帰郷してい

安達原 達 晴

たらどうだったのか、故郷とは何かについて考えるようになる。

親も兄弟も親戚も知人もいないとして、故郷はその人にとって、再び辿り着きたい場所なのか。血縁のない場所に戻って、その人は何を見ることになるのか。わたしは、そこには風景や空気や土地そのものがあるだろうと思い、この小説を書きました。

津村はインタビューでもこの男性が「故郷に帰るはなしを書きたいって思った」として、「故郷とは何かっていうことをずっと考えて、風景が無償で人間に与えるもの、みたいなものを書きたかった。給水塔があって、むかし見て愛着があるからここに住もうって思うおじさんの話です。」と述べている^③。

もともと津村は(非正規)労働などを題材として人と社会の接点へ敏感に分け入り、日常生活や対人関係の機微を巧みに描き出す作品を多く残してきた。特に本作については執筆の動機とい

テーマといい、作者本人が明言している。一方、受賞した川端康成文学賞の選評^④では、テーマ性より短編小説としての完成度と作者の技量を評価する声が大半であった。^⑤もともと、これは川端賞の審査対象が短編であり、「その年度における最も完成度の高い作品に授賞^⑥」するという賞の趣旨に沿ったものといえる。

津村作品へ複数の言及がみられるなか、現時点で管見の限り本作に関する先行研究は皆無である。それは他の領域と比べ相対的に蓄積の浅い現代文学研究だから、という理由のみにとどまらないかもしれない。作者の意図したテーマが明確で、まさにその通りの作品とみなされ格別の追究は求められなかったとも考えられる。

しかし、作者のことばから目を逸らす必要はもろろないものの、以下の点において本作へのより踏み込んだ分析は可能だろう。まず、Nスベ「無縁社会」はブームといつてよいほど日本社会に大きな反響を呼んだ。^⑦大衆の反応はいわゆる無縁死や孤独死に対する不安や危機感として主にあらわれたといえる。一方、後述で触れるように、「無縁社会」論とも呼ぶ議論のなかではこうした報道のあり方とその影響について批判的な検討もなされていく。津村もまたあるエッセイでNスベ「無縁社会」を詳しく取り上げ、番組が果たした意義を一部認めつつも、視聴時の違和感について語る。以上のことを踏まえると、小さからぬ影響力をもつに至った社会的な言説に文学はどのように対峙するのかという観点から、「給水塔と亀」を改めて読み直す行為は無駄ではないだろう。

本稿では先に「無縁社会」論と津村のエッセイなどを現象への批判的なまなざしという点で接続し、その後本作の精読を試みる。本作には何が書かれ、それは社会的な事象とどのように切り結ぶのかを具体的に考えてみたい。

二 「無縁社会」論の功罪——「縁」、「死に方」

大場あやは現在に至るまでの「無縁社会」をめぐる議論^⑧「無縁社会」論を振り返り、整理する。そのなかで、「無縁社会」が「具体的な事例研究」に基づき「批判的検討」を経て「学界に浸透・定着した概念ではない」^⑨（傍点引用者、以下同）ことに注意を促す。「少なくとも学術研究においては、有効かつ戦略的な概念とはなつて」おらず、「誰もが不安を抱く問題に触れながら、往々にして明確な定義がスキップされ」使われることが多い点に議論の限界をみた。^⑩

石田光規は経済的な貧困に加え、労働市場、住宅および地域、人間関係、医療などから排除され社会参加が困難となる、排除の複合性・多元性が近年みられると指摘する。さらにNスベ「無縁社会」を発端とする流行現象は、こうした複合的・多元的な排除の問題を「無縁」、すなわち人間関係上の問題に移し替えたと述べる。「無縁社会」論は問題の本質を人間関係に特化させ、排除の問題をみえにくくしたものである。^⑪

呉獨立は近代化が進み、コミュニティが社会から分離して（関係）と「機能」が一致した状態で経験できなくなったとする。つまり「無縁社会」とは「縁」の喪失というより、「縁」が有して

いた〈機能〉の喪失であり、〈関係〉と〈機能〉の断絶であると論じた。¹⁴大場も呉の論を踏まえ「人間関係それ自体が喪失されたわけではない」点は他の複数の論で言及されると述べ、森岡清美の「東日本大震災後の互助や援助の様子」は「縁のない人はいない、縁はどこかに潜んでいることを教えてくれた」ということを紹介する。¹⁵

大場は「無縁社会」の語が内包する危険性を次のようにまとめる。¹⁶

「無縁社会」という語はキャッチーで使いやすい反面、多様な問題を一緒くたにしてしまう一種のラベリングであり、深刻な問題（社会的弱者の再生産）を別の問題（ライフスタイルの選択）へとすり替えてしまいかねない危険性を孕む点に注意が必要だ（以下略）

本稿の意図との関連で二点ほど強調しておく。まず「無縁社会」の語がもつインパクトと高い流通性により、「ラベリング」的な機能が生じてしまうことである。大場らが指摘する通り問題の本質を見失わせてしまう危険があるのと同時に、そこでは多くの個別具体的な事例が捨象される。次に「縁」というものの性格についてである。たしかに、もし仮に現代の日本社会において血縁や地縁などに基づく共同体が機能不全に陥っていたとしても、その状況を「縁」の全般的喪失と捉えるのは短絡といえるだろう。そもそも、「縁」＝人間関係の価値のみを過剰に中心化

する傾向は、「無縁社会」論のなかで批判の対象でもあった。実はこのことは、津村の川端賞受賞のことばなどにある（故郷とは何か）という問いにも関わるのではないか。

「給水塔と亀」は退職した男が、文字通り「親も兄弟も親戚も知人もいない」（前出「受賞のことば」）「故郷」に帰る物語である。本作で「故郷」は親兄弟や親戚、知人といった既存の人間関係＝「縁」と切り離される。「縁」が「無い」社会を大々的に問題化したNスベ報道へのささやかな異議申し立てとして、本作は「風景や空気や土地そのもの」（同）「風景が無償で人間に与えるもの」（前出インタビュー）を描くのである。作品分析の前に、エッセイ「正しい死に方なんて誰も知らない」¹⁷から、津村がNスベ「無縁社会」に具体的にどのような反応を示したのかを確認したい。

このエッセイにおいて津村はNスベ「無縁社会」を「とても良い番組だったし、重要な問題提起はされている」¹⁸としながらも、番組への違和感をいくつか述べる。ひとつは、「演出過多な印象」である。例えば、「母親の介護で婚期を見送ったおばあさんの食卓」を無灯の部屋から「斜め下のアングルで撮る」。この場面に津村は疑問を感じ、「老女一人の食卓で、ごはんをおいしいと思うことなどあり得ないとも言いたげ」と評している。

津村自身、無縁死を怖れているのか「それとも誰もいない部屋で腐ることが怖いのか、孤独な老後が怖いのかを、すべてごっちゃにしてとらえている」ことに気づく。これは無縁死、孤独死という影響力の強いことばが問題を一元化しやすいことを、逆説

的に提示した所感といえる。死という問題については、番組を超えて人々が無意識に抱える通念の盲点を突くかのような重要な問題提起を、さらに津村は投げかけている。それはまさにこのエッセイのタイトルに関わる。

津村は「死に方が人の功績を選ばないことも、厄介といえれば厄介」という。いわゆる孤独死を迎えた二名の著名人の例を挙げ、「結局、生前の仕事なんかより、人とうまくつながれたかなだよねってことになるのだろうか、とむなしくもな」る。「死に方」の問題の「厄介」さは次のようにまとめられる。

家族を作ること、鉄板のセーフティネットにならず、生前の功績も無にしてしまう、「死に方」という身の処し方の一項目は、とても残酷でハードルの高いものだと思う。それも、衰えた先の最後にやってくるという容赦のないものである。

「ただ」と津村は続ける。「死に方」は身の処し方の一項目でしかない。く、「人間がいちばん気をつけなければいけないことではない」。「あくまで「死に方」は、人が「気をつけなければいけない」「たくさん」のこのうちの一つである。津村はまた、「死に方」が人の生き方を縛るのは「とても寂しいこと」とし、「ある程度「死に方」から自由に生きられるように、最低限の妥協点を見いだしていきたい。」ともいう。

ここで津村が問題にするのは、やはりラベリング的な威力に人々が目を奪われ、知らぬ間に想像力を塞いでしまうことだろ

う。「死に方」という人生の終着点ではあるが全人生の一断片でもある要素からその人物の生そのものを判定するのは、必ずしも適切ではない。死の話題を中心に、意図的か否かを問わず番組がつくり出してしまう先入観や偏見に津村は鋭く反応する。「死に方」が人の生の価値基準になってしまふとき、「縁」の有無（人とうまくつながれたか）が前提とされる。この点について疑義を呈していることはも重要だろう。総じて、ラベリングにより個人の生の全体性に対する想像力が遮断されることを、津村は警戒するようにみえる。

以上、ラベリングへの抵抗という点で津村のエッセイは、先にみた「無縁社会」論での批判的検討に通じる。ただし、作家である津村は小説という媒体を活かし、人が生きるという営為への想像性を担保しようと試みたと考える。次節から、「給水塔と亀」の具体的な分析に移りたい。

三 「給水塔」のある風景

既に少し述べたが、本作は定年退職した未婚の男性が故郷に戻ることを決め、引越した当日の出来事を語る。男性「私」が故郷に「頼るものは特にない」⁽¹⁹⁾。帰郷を決めたきっかけは、元同僚の依頼で郷里の物件を調べたときであった。出身地域の家賃が格安であることにつられ、「そのままなんとなく引越しを決めた」。「定年を迎えて無職になった男の一人暮らしは身軽だ」という「私」のことばからも、「引越し」に対する気安さが窺える。転居先が郷里であることの必然や意味の重さは、「私」の言動に感じ

られない。

男性の帰郷は偶発的であり、郷愁（ノスタルジー）のような感傷とは距離があると考えられる。では、彼は故郷とまったく疎遠であり、その地をかえりみることはこれまでいっさいなかったかといえ、けっしてそうではない。「私」は「母親が亡くなったから、この周辺には完全に身寄りも途絶えて、数年に一度菩提寺を訪れるぐらい」であつた。つまり、故郷とのつながりは皆無ではないということである。心に常に浮かべて焦がれる対象ではないが、肉親の墓参にはたびたび訪れる土地。憧憬でも忌避でもない、「私」と郷里の距離感をまず確認しておく。

家賃だけで決めるなら「どこでも選び放題」という物件の中から転居先と契約した理由を「私」は、「自分の昔の家がその近くにあったから」と述べる。もちろんこれは、「私」が郷愁を覚えたからではないだろう。「私」と故郷の距離感を踏まえてもそれは明らかである。「私」が転居先を選んだのは、「給水塔」のある風景を求めたからである。最初は「思つたより記憶の中の風景と今のそれが合致せず」、意中の風景を得ることができない。

給水塔があつたのだ。どこかは思い出せない。（中略）私
は、白群びやくぐんというのか瓶覗かのぞきというのか、美しい水色に塗装された、小学校よりも背の高いその威容に惹かれて、友達と遊ぶ合間に、彼らの目を盗んでいつも見上げていた。（中略）
私は、ああいうものを建てたい、と漠然と思つて、水回り関連に強いという建設会社に入社した。

前掲した津村による川端賞受賞のことばなどからも分かる通り、本作において「頼るものは特にない」「私」にとり郷里は、少なくとも既存の「縁」＝人間関係と切断された空間である。「私」が帰郷するに至る経緯の偶発性は、その地に特別ノスタルジックな愛着を抱いていないことを示す。本作では〈懐かしい〉といった表現の使用は周到に除外されているようにもみえる。

しかし、故郷の「風景」は確実に何かを「私」へもたらすはずである。そこには、定年退職までの長きに亘るキャリアをおそらく精神的に支えただろう、「給水塔」がある。キャリアに就く動機を与えた原風景は、「縁」とも郷愁とも無関係に「私」という個人の生を力づけてきたと考えられる。読者は「給水塔」の風景を始点にひとりの男性が生きてきた時間の幅と厚みを思い描くかもしれない。「私」の人生の全体を喚起させる風景である。先走つていえば、本作は「私」が「給水塔」を再発見し、自身の生の全体性を再確認する物語であるといえるだろう。

「親も兄弟も親戚も知人もいない」「故郷」に人は何をみるのか、という津村が明示した問いに「給水塔」のある風景は分かりやすく答えている。一方、エッセイ「正しい死に方なんて誰も知らない」にある「死に方」の問題についてはどうだろうか。実はこれも、作中でかなり大きな位置を占める。「死に方」をめぐる叙述は、「私」が未婚であることを入口に導かれる。これまでみてきたように、人が未婚で身寄りがいないこと（あるいは孤独であること）とどのような死を迎えるのかは同一直線上の案件とされやすい。次節では津村のインタビューにも再度触れつつ、作中で

「私」がみせる未婚や「死に方」に対する態度を確認する。延いては、「給水塔」と並び本作において重要な表象となる「亀」の意味を探りたい。

四 「独り者」をめぐる姿勢、剰余としての「亀」

「私」が住むことになる新居（アパート）の管理人は、「あんた変わってるわ」と言う。このことは、直接的には「私」が通販で自転車（クロスバイク）を購入したことに向けられる。しかし、直後に乃代さんという「私」の部屋の前住人が同じく「ちよつと変」で「独り者」であったと話し出す文脈から、管理人の中年女性がめぐらせた発想を読むのは容易である。すなわち、独身のまま生涯を終えそうな者＝「変」ということである。

また、管理人は退職後の生活を送る乃代さんを「この人孤独死しそう、とうさんくさく、思っていた」。「うさんくさ」さの内実に踏み込めば、孤独死の後に遺体が放置されるなどして管理人である自分に迷惑がかかる可能性への危惧といったところだろう。

少なくとも「私」と初対面となるこの場面において、管理人は未婚を続ける年配者に向けられたいわゆる〈世間〉²⁰の視線がとりがちなひとつのパターンを代表するといえる。本作が定年退職した独身男性による恬淡とした一人称を採用するにも関わらず、内閉的な印象をもたないのは、ひとつにはこうした外部のまなざしが描き込まれるからである。好奇の対象として〈世間〉にまなざされた「私」は、どのようなことばで対抗するのか。

「乃代さんといいあんたといい、どうして一人でいられるの？」

と管理人は率直に問う。彼女の左手薬指には指輪がはまっている。「私」は「忙しくて不器用だったんです」と返し、頭でこれまでの来歴を辿る。二十八歳、三十七歳、四十五歳でそれぞれ訪れたものの実らなかった機会を少し具体的に振り返る。仕事で既婚者に代わり飛ばされた各地の女性とときには親密になっても、話が進展しそうなタイミングで呼び戻されたことを思い出す。

いつまでも気楽でいたいと思っていたわけではない。けれど、いろいろなことの間が悪くて、私も積極的になれなかった。後悔はしている。人間が家族や子供を必要とするのは、義務がなければあまりに人生を長く平たく感じるからだ。その単純さにやがて耐えられなくなるからだ。

管理人が体現する〈世間〉のまなざしの一典型は、「独り者」と「孤独死」を結びつける思考である。裏返すと、「孤独死」を回避するための方策の一つが結婚であるという認識といえる。「無縁社会」に関する議論の弊害は、「縁」＝（特に既存の）人間関係の価値を過大視する傾向を生んだことにある。無縁死、孤独死への不安が煽られた結果、結婚というライフイベントもそれらを予防する術、方法として過度に捉えられるようになったのではないだろうか。大袈裟にいえば、死の問題へ結婚を戦略的に従属化させ、道具化してしまうということである。

そのような結婚の意味づけとはまったく異なり、本作中で「私」は家族や子供の必要を「義務がなければあまりに人生を長

く平たく感じるから」「その単純さにやがて耐えられなくなるから」と語る。結婚を無縁死、孤独死対策としてではなく、人生の平板さや単調さから免れ素朴な充足を手にするためのものとして、いわば実存的な位相でみている。ただし、興味深いのは、先ほどの引用の直後に「というような考えは、引越し業者の到着とともに雲散霧消してしまった。」とある点である。²⁰

「無縁社会」論で硬直化した死と結婚の議論を、ここでは二重に相対化していると考えられる。要するに、「私」にとつて自身は「独り者」であることはどうでもよく、さして気に留めるような重い命題ではないのだろう。前出インタビューで津村も、「私」が「後悔はしている」と語ることにについて「後悔は——稿者」一応、するんじゃないですか。でも、そんな深い後悔っていうのはなくて、そうでしか在れなかったから、っていうふうに。」と述べる。²¹そもそも「私」の「後悔」は、結婚しなかったことを深く悔いる性質のものではないのである。

「私」は自身が迎える可能性のある「死に方」にも、格別の懸念や思い入れをみせない。管理人はアパートの部屋でひとりで亡くなった乃代さんについて、その死がみつかる経緯や事後のことを詳しく話した。「私」の反応は淡泊である。「彼女は、私のこともそうやって誰かに話すのだろう。私に何かあったら。まあ、良い。」「無縁社会」論は、例えば管理人が「私」に向けたような「世間」のまなざしをより強化したと推測できる。「私」のことはそのまなざしをあからさまにはねつけるでもなく、もちろん従容とのみ込むわけでもなく、さりげなく受け流し、無効化すると

いえる。

話題が前後するが、管理人の話す乃代さんの最期は次のようであった。彼女は心不全により亡くなる前日まで退職後の職場で働いていた。常日頃から同僚には、連絡なしに自分が欠勤したときは自宅まで様子をみに来てほしいと頼む。彼女は緊急連絡用に携帯の使用にも慣れていて、同僚は電話に出ない乃代さんの部屋に行き、彼女を発見したのである。遺言はすぐ分かる場所に用意され、私物や財産の処分も迅速になされるよう準備が整えられていた。同じく前出インタビューで、乃代さんの死に方が「かなりベストに近い」と津村は語る。さらに「とにかく迷惑をかけたくないっていうのが大きいので、早めに見つけてほしい。そのためのサービスを購入することは20代ぐらいから考えてます。」とも述べる。

たとえ「正しい死に方なんて誰も知らない」としても、未婚者が自らの死で他人に「迷惑をかけ」ることに対するリスクヘッジは怠りたくないということだろう。作中の乃代さんは管理人によれば、退職前は「保険の外交で働いて、営業所の所長とかにまでなった」人である。生前から自身の死後の対処に的確に気を配るさまと併せて、その堅実、計画的で社会性を備えた人物を彷彿とさせる。結果的に、彼女が「この人孤独死しそう、とうさんくさく思」う管理人（「世間」）の眼を正面から受け止め、それに正攻法で対峙したと捉えることはできる。しかし、本作において乃代さんが存在感を放つのは、実はそこではない。

管理人は「私」に乃代さんの最期をひと通り話した後、「ただ、

亀なんか飼ってさ、これが困って」と伝える。「死ぬ二ヶ月前とかに飼いはじめちゃったから、遺言にもな」い。乃代さんがなぜ「死ぬ二ヶ月前」に亀を飼いはじめたのか、本作では明かされない。乃代さんは「亡くなる前日」まで働き、死因は「心不全」である。自らの死期を悟って亀を飼いはじめた可能性は低く、乃代さんの死と亀（を飼うこと）は無関係にみえる。いずれにせよ、乃代さんが亀を飼った動機は「ただなんとなく」といった瞬発的、偶発的なものも含め複数考えられる。この点については後述する。

ここでは「亀」が、いずれ訪れる死を想定して綿密に準備していた乃代さんの計画から、意想外にはみ出したものであることを確認したい。前述したが、彼女がどこまで意識したかはともかく、乃代さんの行為は自身がひとりですむことで周りに迷惑をかけないためのリスクヘッジとして（世間）には解釈されるだろう。飼いはじめられた「亀」は、このリスクヘッジを裏切り、そこから逸脱する存在である。津村の表現を借りれば、（世間）が要求する「正しい死に方」に収まらず、うっかり余ってしまった「亀」。「私」の語りが「無縁社会」論における死と結婚の議論を相対化すると同様、乃代さんもまた（世間）に流通する「死に方」をめぐるコンセンサスを、図らずも無意味化するのである。

津村は前出エッセイで人の生涯が「死に方」のみに収斂され、その総合的な評価が下されることに違和感を覚えていた。作中の「亀」は乃代さんの「死に方」を跳び越えて「私」、あるいは読者に彼女の女となりへの想像を促すものといえる。「私」の生き方

や社会人キャリアの幅と厚みが出発点たる「給水塔」の風景から想像されるのと同じく、乃代さんの生の全体が終着点からこぼれ落ちた「亀」により照らされる。剰余としての「亀」の存在を念頭に置きながら、次節では「私」が新たな生活を始める初発の一日をさらに詳しく追ってみた。

五 〈生活〉の「調整」、**「亀」**が導く想像力

「給水塔と亀」は、文庫では十四ページほどの短編である。その最後約五ページで「私」が今後送るだろう新生活の兆しが、静かに立ち上がる。アパートに旧居から家具が運ばれた後、まず「私」は先に届いていたクロスバイクを「調整」する。

説明書の入っている袋には、六角レンチが同梱されていて、それで、梱包のために横を向いて調整されているハンドル部分を正面に戻したり、サドルを調整したりするらしい。私は、自転車左側の立って、片目を閉じたり、何度かまばたきをしたり、体を傾けたりしながら、自転車のハンドルの向きを調整した。取扱説明書によると、私が六角レンチを使って調整した、ハンドルとフレームをつなぐ部分は「ステム」というらしい。一つ学習した。

部下から「とても楽しい」と勧められ購入したスポーツバイクだが、「田舎」での生活には必須な移動手段である。「私」は〈生活〉の準備を着々と進める。左は梱包のため変形されたバイクを

再び利用できるような復元するという、何気ない場面である。ただ、かなりリアルで、「私」が身体を駆使して無心にハンドルを調整する所作が目につく。生活のため不可欠な、至極当然の行為なのだが、彼の様子はそれ以上の何かを示唆するようにもみえる。これから述べるように、「私」は本作全編を通じて自身の生活圏を形づくる、その諸につく。それはゼロから新しく生むというより、彼が積み立てた経験を活かし、定年退職と転居により一時的に変形した己の生活を「調整」して復元する試みであるといえないだろうか。自転車を「調整」する件の場面は、「私」が本作でみせる営みの先駆けのメタファーと捉えたいのである。

物語の最後、「私」は「給水塔」をみつける。海に臨んだ自室のベランダでビールを飲むとする「私」は、給水塔が「ベランダの端の斜め向こうの方向に建っているのに気づく。「私」が移動していた国道側ではアパートの陰に隠れて見えなかったのである。缶ビールを飲む至福のさなか、「私」は「帰ってきた、と思う。この風景の中に。私が見ていたものの中に。」と深い感慨を語る。「帰ってきた」とあるが、やはり「私」のことは郷愁、ノスタルジーと似て非なるものである。生きる力を、働く意欲を与え、背中をさりげなく押し続けた「給水塔」の風景を再び見出した「私」は、新たな生活へ静かに歩きはじめ。過去に埋没するのではなく、過去と連れ添いながらも前を向き、〈生活〉するために過去を上書き、更新する。多くの者が当然のごとく経験するそのような営為を、「私」はその地で続けるに違いない。

同じ結末部分で「私」は「忘れていたことを思い出」す。「履

歴書を書く」ことである。実は物語の冒頭は、菩提寺の門を出た「私」が前方にあるうどんの製麺所の壁に「求人 の 貼り紙」をみつめる場面である。「寺の前のうどんの製麺所」は男性の幼少期から残る。この求人に「私」は応募することを決めている。職種は異なれど〈働く〉ことの入口に立つ「私」に、かつてのように「給水塔」の風景はやさしく力を授けてくれるだろう。もはや「給水塔」は単なる過去の風景ではなく、彼が営む現在の生活を見守り支援する日常の風景である。繰り返すが、「親も兄弟も親戚も知人もいない」「故郷」の「給水塔」は、既存の「縁」とも郷愁とも無関係に「私」個人の生を常にそとと力づける。

一方、過去の空間が生活の現在に紐づけられ、書き換えられていくのと同時にうつすらながら新たな縁の萌芽も各所にみえはじめる。おそらくこの縁は、津村が違和感を抱いた「正しい死に方」の前提とみなされるようなそれ（第二節参照）ではないだろう。縁＝人間関係は、人が普通に生きていく過程で自然発生的な要求に応じて編まれていく。津村の指摘に従えば、既存か否かを問わず縁とは「死に方」に縛られず自由に考えるべきものである。本作では引越した初日にして、「私」を取り巻く縁の気配を拾うことができる。

「私」が通った小学校はまだあり、敷地内の「地域住民見守り隊」という札が掛かった小屋をみて参加できないかと思う。周辺に一軒のみ存在するコンビニで品揃えを確認し、レジの女性に隣の店をいくつか教えてもらう。そのうちの一つであるスーパーへ「調整」したクロスバイクに初めて乗って行くと、いかめしい

マウンテンバイクが駐輪場に止まっていた。持ち主も、ツーリング用の本格的な装いをした一見怖そうな男性であった。自分より年上らしいその男性はしかし、「私」に気さくに話しかけてくれる。土地の道路事情に詳しく、走るにはクロスバイク向きだと説く彼は、一定期間を地元で暮らしているはずである。

職場候補（製麺所）もみつかり、新生活の「調整」は順調である。管理人とすら、打ち解けて交われるかもしれない可能性を本作は僅かだが示す。できた点が線となり、「私」の〈生活〉の根が着実に張られ、伸び広がるさまを読者は想像できるだろう。作中に流れる時間は短いが、「私」の生の全体ははやくも輪郭をとります。そのとき、「亀」と共に乃代さんの人物や生涯もまた、読者の眼前に浮かび上がってくるのである。

「私」は彼女が残した亀を引きとって飼うことにする。明確な理由は語られない。結末、ベランダで缶ビールを片手に海と給水塔を眺める「私」の傍らには、亀の水槽がある。「亀が水槽の中で身じろいで、砂利がかすかな音を立て」た。「身じろ」ぐ「亀」と「体じゅうの細胞がわなくなっていく程に」ビールの美味に浸る「私」とが、共鳴しているともとれる。実際、乃代さんが自らの死期を見込んで立てた計画から漏れ出た「亀」――生の剰余、切片と「私」が作中で「調整」していた再出発の片鱗とは反響し合うのではないだろうか。

「亀」がいなければ、乃代さんはその「死に方」によっても保険の外交員で営業所所長という前職に相応の、律儀な人物像を補完し得たはずである。ところが「亀」の存在がそのようなキャラ

クターに再検討を要請し、かえって彼女の生の全貌を想像する方向へと読者（あるいは「私」）を駆り立てる。まず、彼女はなぜ亀を飼いはじめたのか。急激に襲った独り身の寂しさを少しでも紛らわすためか。もしかしたら、詳細は不明だが「亀」は乃代さんにとって「私」における「給水塔」のような役割を果たしたのかもしれない。働くための動機づけ、そうではなくとも背中に手を当て力をゆつくり注いでくれるようなものだったかもしれない。「私」がやがて築く気配をみせたような、その土地での新規の人間関係にまつわる何かだった可能性もある。まさに「私」がそうしたように、誰かから引き取ったものかもしれないのである。

「私」の営みを参照しつつ、「亀」という小窓からひとりの人間が〈生活〉した痕跡をのぞき込み、その全体を想像してみる。想像の手掛かりとなる「亀」は作中から退場せず、「私」のもとにあり続ける。きつと「私」は「亀」になじり気配を配りながら、乃代さんの人生にさりげなく思いを馳せるのだろう。

六 まとめ

本稿ではNスベ「無縁社会」をきっかけに書かれた、津村記久子「給水塔と亀」を取り上げた。「無縁社会」をめぐる一連の議論を総括したとき、語のインパクトも加算されラベリング的な機能が生じてしまうという指摘があった。たとえば、家族や結婚を中心とした人間関係やライフスタイルの問題と無縁死、孤独死の問題とが短絡され、他の社会問題が覆い隠されるという具合にで

ある。津村もまた、作家の立場からインタビュアーやエッセイなどで未婚（单身）、無縁死、孤独死に関する発言を行う。津村はこうした現象に囚われすぎるあまり、普通に日々を送ることに對する想像力がせき止められる事態を警戒したと考えられる。

本作の語り手「私」は、おそらくNスベ「無縁社会」以後に強化されただろう、無縁死、孤独死への怖れや忌避感をいやすような身振りをとる。「私」が職に就く動機づけとなった「給水塔」と、乃代さんの死から図らずもこぼれ出た「亀」は、どちらもその人が生きてきた軌跡を丸ごと想像させる表象といえる。人の生の全体性へ向けた想像力を手放さずに担保しようとする試みが、本作ではなされる。「給水塔と亀」は、結果として大衆に無縁死、孤独死の大きな不安を招くことになった社会的な言説に応答した、文学の側からのひとつの抵抗表現とみなせるのではないだろうか。

註

- (1) 第三十九回（第二期第十四回）川端康成文学賞「受賞のことば」。『新潮』二〇一三年六月号。後述の「男性」に関する記述や引用等もこれによる。
- (2) 取材報道をもとに単行本化した『無縁社会―「無縁死」三万人の衝撃―』（NHK「無縁社会プロジェクト」取材班編、二〇一〇年一月、文藝春秋）がある。
- (3) 読売新聞オンライン二〇一八年八月二十四日「全部得られないこともある 津村記久子さん」<https://www.yomiuri.co.jp/topics/20180823-OYT8T50000/> 閲覧日：二〇二四年一月四日

- (4) 前掲注（1）に同じ。
- (5) 例えば「伏線とその自然な、さりげない回収」（辻原登）、「語らぬ短編」の最良の例（津島佑子）、「切り詰めた描写と、飾り気のない言葉の周囲に生えたユーモアの和毛。」（堀江敏幸）、「短い枚数の中に文章の一つ一つがぶれもなく、布石されて完結するよう。」（村田喜代子）など。
- (6) 『新潮』掲載の川端康成文学賞の趣旨文による。
- (7) 「無縁社会」は「現代用語の基礎知識」選・ユーキャン新語・流行語大賞第二七回二〇一〇年授賞語トップテンの一つ。
- (8) 大場あや「『無縁社会』論の諸相と展望―孤独死と葬制をめぐって―」、『文化』第四二号、二〇二四年三月、駒澤大学。以下、「無縁社会」論に関する記述は大場の論による。ただし、大場以外の論考についても原典を適宜確認した。
- (9) 前掲注（8）、九四頁
- (10) 同一二頁。また大場は、「現代の日本社会Ⅱ『無縁社会』ということ」を前提に議論を進めることには慎重になるべきである」ともいう。
- (11) 石田光規『孤立の社会学―無縁社会の処方箋―』、二〇一一年一月、勁草書房、四一七頁
- (12) 同九頁
- (13) 同二一―二三頁

- (14) 呉獨立『孤独死現象』の社会学―實在、言説、そしてコミュニティ―、二〇二二年九月、成文堂、一八三頁
- (15) 前掲注(8)、九九頁。森岡清美のことばは『無縁社会』に高齡期を生きる(二〇二二年七月、佼成出版社)による。
- (16) 前掲注(8)一〇〇頁
- (17) 津村記久子『二度寝とは、遠くにありて想うもの』(二〇一五年四月、講談社)収録。引用・参照は講談社文庫版(二〇一九年三月、単行本を一部加筆・修正)一四八―一五六頁による。
- (18) 例えば、津村が評価した点の一つに「孤独というものの扱い」がある。人との連帯をテーマにする場合セーフティネットとしての「家族」に落ち着くのが「常套」だが、離婚により「家族」も保証の限りではない。こうした番組による提起は「画期的」、「新機軸」であるとする。
- (19) 以下、『給水塔と亀』の本文引用は初出によった。引用文中の傍点は稿者により、ルビは一部省略した。
- (20) ただし、作品終盤では管理人との友好的な関係性が築けるかもしれないと読者に思わせるような、小さなやり取りも描かれる。
- (21) 前出「正しい死に方なんて誰も知らない」で津村は、「確かに、せんじつめると家族は孤独という現象のパッチではない」と端的に述べる。
- (22) 戌井昭人もこの箇所に触れ、「いつまでも気楽で…」の件で「身につまされる気がした」が、「へへへ、まあいいか」と
- (23) 思えてきた」という。戌井昭人「解説」、津村記久子『浮遊霊ブラジル』(文春文庫)、二〇二〇年一月、文藝春秋
- (24) 前掲注(3) 同右
- (あだちばら・たつはる 本学准教授)